

人類学と国際保健医療協力

著者	松園 万亀雄, 門司 和彦, 白川 千尋
発行年	2008-02-25
URL	http://hdl.handle.net/10502/4376

あとがき

本書は、二〇〇六年一月一日から一三日にかけて長崎市で開催された、第二一回日本国際保健医療学会・第四七回日本熱帯医学会合同大会における二つの講演とシンポジウムに基づくものである。「まえがき」でも触れられているように、本書を構成する各章のうち、第2章は松園による特別講演を、第7章は門司による日本国際保健医療学会総会大会長講演を踏まえたものであり、残りの第3章から第6章までは、シンポジウム「文化人類学は医療協力の役に立つのか?——医療従事者と人類学者の対話に向けて」における報告をベースにしたものである。

シンポジウムのねらいなどについては、やはり「まえがき」で触れられているので、ここではその具体的な内容について簡単に補足しておきたい。シンポジウムでは、オーガナイザーの尾崎敬子と關雄二の両氏が座長を務め、やはりオーガナイザーであった岸上伸啓氏による趣旨説明の後、井家、杉田、大橋、白川が順に報告を行った。なお、各報告に対してはコメンテーターからコメントや質問が提起された。各報告のタイトルとコメンテーターの氏名（およびシンポジウム時の所属先）は、次の通りである。

井家晴子「ハイリスク妊娠・出産と人々の「異常」概念——モロッコ農村部における母子保健政策と住民の葛藤」

コメンテーター・尾崎敬子（結核研究所）

杉田映理「ウガンダにおける病因論と下痢症削減対策への示唆」

コメンテーター・増田研（長崎大学）

大橋亜由美「国際医療協力、人類学、対象地域のはざままで——インドネシア・スラウエシ地域医療開発プロジェクトの事例より」

コメンテーター・岸上伸啓（国立民族学博物館）

白川千尋「医療協力における文化人類学の二つの役割？」

コメンテーター・池田光穂（大阪大学）

その後、佐藤寛氏（アジア経済研究所）が座長を務め、四人のシンポジストとコメンテーターの池田氏が参加してパネルディスカッションが行われた。ディスカッションの際にはフロアーからも多数のコメントや質問が寄せられ、活発なやりとりが交わされた。

「まえがき」でも述べられているように、このシンポジウムは、いわゆる医学系の学会で行われたものでありながら、非医学的なアプローチをとる研究者だけをシンポジストとしている点で、ユニークなものであったと言える。ただし、医学系の学会でも、とりわけ国際保健医療協力とかかわりの深い学会などでは、これまでも文化人類学者による研究発表が（多くはないにせよ）行われており、必ずしもすべてのシンポジストが文化人類学者というわけではないが、文化人類学者が加わったシンポジウムもまた実施されている。たとえば二〇〇二年八月に神戸大学で開催された第一七回日本国際保健医療学会総会では、「国際保健と人

類学の接点」と銘打ったシンポジウムが行われ、私もシンポジストとしてこれに参加している。

このように、本書のもととなったシンポジウム以前にも、国際保健医療協力の場における文化人類学との隣接分野の果たし得る役割や課題などをめぐる議論、あるいは情報発信はすでに試みられてきている。また、公衆衛生型の医療協力プロジェクトの増加にともない、プロジェクトの活動に直接関与する文化人類学者などがみられるようになった昨今、そうした試みはこれまで以上に増してきている印象を受ける。手前味噌で恐縮だが、私自身も二〇〇六年一〇月の合同大会の初日に、「人間を中心にしたマラリア対策——ミンマーJICAプロジェクトからの提言」と題する研究集会をオーガナイズしたことを申し添えておきたい。この集会では、私と同じくミンマーのマラリア対策プロジェクトにかかわった医師、看護師、媒介昆虫学者、臨床検査技師の方々を発表者にむかえ、マラリア対策プロジェクトの場における非医学的アプローチの重要性や、そこでの文化人類学的視点の位置づけなどをめぐってディスカッションを行った（この研究集会も先のシンポジウム同様、国立民族学博物館の機関研究「文化人類学の社会的活用」のなかの「日本における応用人類学の展開に関する基礎的研究」（代表者：岸上伸啓）の一環として行われたものである）。

ただし、研究発表やシンポジウムといった口頭発表の形をとった文化人類学者などによる情報発信は比較的目的につくようになってきている反面、活字媒体を使った情報発信、とりわけ論文集やモノグラフといったまとまった形によるものは、日本では未だほとんど蓄積がない状況である。この点で、本書は、いささか大仰な表現を使えば、そうした形の出版物としては先駆的なものと言いうこともできるだろう。ともあれ、本書の出版を機に、文化人類学をはじめとする人類学と国際保健医療協力のかかわりに関する議論が、医療協力を携わる人びとの間で、とりわけ人類学者と医学系の研究者や実務者との間でより一層活発化し、ひ

いてはそれが具体的な活動の場に生かされることにつながれば幸いである。

本書のもととなった講演とシンポジウムは、多くの方々の多大なるご協力とご支援によって実現した。すでに「まえがき」などでも挙げられているので、ここでそのお名前を再び挙げることは控えるが、オーガナイザー、コメンテーター、座長としてご協力いただいた各氏には、あらためて深く御礼申し上げます。また、講演とシンポジウムの際に、フロアーから貴重なコメントや質問をお寄せくださった方々にも感謝の意を表したい。最後に、本書の出版に当たって多大なるお力添えをくださった明石書店の法月重美子氏に、編者を代表して深謝申し上げる次第である。

二〇〇七年師走の民博にて

白川千尋